

種名	浦幌	音更	釧路
3. ホソミモリトンボ			○
4. コエゾトンボ		○	○
5. エゾトンボ	○		○
6. キバネモリトンボ	○	○	○
7. タカネトンボ			○
トンボ科			
1. シオカラトンボ	○		○
2. シオヤトンボ			○
3. オオシオカラトンボ		○	
4. ヨツボシトンボ	○	○	○
5. タイリクアカネ			○
6. エゾアカネ	○	○	○
7. ミヤマアカネ	○		○
8. ムツアカネ	○		○
9. ナツアカネ	○		○
10. アキアカネ	○	○	○
11. ヒメアカネ			○
12. マユタテアカネ	○		○
12. ヒメリスアカネ			○
14. コノシメトンボ			○

種名	浦幌	音更	釧路
15. ノシメトンボ	○	○	○
16. キトンボ	○		○
17. カオジロトンボ			○
18. エゾカオジロトンボ			○
19. ウスパキトンボ			○
計	23	13	46

(釧路地方については、釧路叢書第18巻 釧路湿原、釧路湿原総合調査団 S 52. 7. 30 釧路市 209頁以下より、音更国見山については、国見山自然観察教育林の環境、帶広営林局 1976. 107~108頁より作成)

参考文献

- ①原色昆虫大図鑑 III 安松京三、朝比奈正二郎 石原保、S 40. 5. 30 北隆館
- ②標準原色図鑑全集 2 昆虫 中根猛彦、青木淳一、石川良輔 S 41. 5. 1 保育社
- ③カラー日本のトンボ 浜田康、石田昇三 S 48. 7. 1 山と渓谷社
- ④アーニマ '77. 7月号 トンボの世界 平凡社

モコト式土器の新資料

—— 浦幌町平和遺跡出土の縄文中期の土器 ——

後藤秀彦

I、はじめに

ここに紹介する資料は、1967年及び1970年に発掘調査の実施された北海道十勝郡浦幌町字平和85番地所在の平和遺跡（大場・明石、1968）（明石、1971）から出土したものである。資料裏面には、『SH-3北』とのみ記載されているが詳しい出土位置及び出土状況は不明である。また、『SH-3北』と記載されているところからみると、1967年の第1次発掘調査時に出土したものである。これらの土器片については、報告書中には何らの記載も見られないが、該資料が最近注目されている縄文中期の北筒IV式土器群に先行すると思われるモコト式土器の一バリエーションをなすものと思われたのでここに報告する次第である。

II、土器の特徴

SH-3北とネーミングされた土器片のうち、一

群の土器と思われるものは、Fig. 1 に示したものがその全てである。この他に縄文早期の無文土器や北筒IV式土器が少量あるが図示はしていない。

図示した資料の共通する様相は概ね次のとおりである。

地文に斜行の縄文を施し、胎土に植物性纖維、円礫を含み、口縁下に垂下しあるいは囲繞する太い隆帯をもつ。隆帯上にも刺突が加えられ、更に口縁部付近にも右方向からの扁平ヘラ状の工具による刺突が幾段にも加えられる例がある。また、地文の縄文は例外なく口唇部及び器内面上方にも施されている。器壁は11~12mmのものが多い。

1は口縁部の大形破片である。平縁であるが山形の突起をもち、山形突起の頂点部から垂下する幅12mm程の隆起帯が、下方では囲繞するであろう隆起帯と接続している。隆起帯上は指による刺突が加えられ、瓜痕も残っている。2は口縁部近く



Fig. 1 平和遺跡出土の土器

の破片で、若干外反する様相をみせている。ヘラ状工具による斜右方向からの刺突が加えられ、破片中央部には垂下する隆起帯があつたらしいが剥脱している。胎土には、前記のほかに極く微量の

黒曜石粉と石英を含んでいる。3は小形破片であるが斜位方向に走る隆起帯をもつてゐる。4は胴部の破片である。1.5cmほどの円礫を含み、裏面はヘラによる整調痕が認められる。5は口縁部近く

の小形破片である。表面文様の $\frac{1}{2}$ 程は剥脱しているが、ヘラ状工具による刺突が認められる。6は、口縁部から胴部に至る大形破片である。口唇下には囲繞する隆起帯が施され、その上を縄原体による押圧が加えられている。隆起帯下には半載竹管による斜め右方向からの刺突が6段にわたって施文されている。この破片からみると、器形は直立し、胴部のやや膨らむ平底になるらしい。7は胴部の破片である。8も同様の小形破片である。

III、考察

IIでその概要を記述した土器群は一括の資料と考えて良いものと思う。同様の胎土、共通性の強い文様構成などは、このことを強く指示しているようである。

こうした土器群は、藤本強が先に示したモコト式土器（藤本、1976）のバリエーションと考えられる。こうした土器は、宇田川洋によれば、常呂TK17遺跡（藤本、1972）・トコロチャシ（駒井、1964）・標茶町金子遺跡（宇田川、1976）・稚内市オニキリベツ（菅・飯田、1973）・網走市大曲（児玉・大場、1955）・札幌市平岸坊主山（畠、1966）・新冠町永川神社などからの出土があるという（宇田川、1977）。十勝管内では池田町青山からの出土が報ぜられている（山崎、1972）。

さて、これらの土器の編年的位置付けについては、藤本強は北筒式土器直前（藤本、1976）と考え、宇田川洋も縄文中期中半（宇田川、1977）とほぼ同様の考え方を示している。まだ、沢四郎もこれを指示しているようである（沢、1979）。

こうしてみると、これらの土器が縄文時代中期中葉の北筒式土器群直前に編年されることが指示されているが、「縄文伝統」を強く具有する静内中野式等に後続しつつ数型式のビアタスをもって本土器群に移行していくものと思われ、囲繞あるいは垂下する隆起帯が発達して北筒式土器群に通有な口縁部の肥厚帯として移行していくものと思われる。裏面に残された縄文も北筒Ⅱ式などでは顕著に見受けられる特徴であるし、Fig. 1-1のような山形突起の存在もこれを証明しているかも知れない。

IV. おわりに

非常に簡単ではあるが、浦幌町平和遺跡出土のモコト式土器について報告した。しかし、この土器群及びその前後の型式との相関については不明な点が多くある。道内においても未だ資料が少ないので後日、資料の蓄積を待って再検討したい。

（浦幌町郷土博物館学芸員）

引用文献

- 明石博志（1971）『平和遺跡』 浦幌
 宇田川洋（1976）『釧路川中流域の縄文早期遺跡——金子遺跡——』 標茶
 ——（1977）『北海道の考古学』1 札幌
 大場利夫・明石博志（1968）『浦幌町新吉野平和遺跡』1 浦幌
 児玉作左衛門・大場利夫（1955）「網走市大曲洞窟出土の遺物について」『北方文化研究報告』10. 札幌
 駒井和愛（1964）『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下 東京
 沢 四郎（1979）「北海道の土器」『世界陶磁全集』1 日本原始 東京
 菅 正敏・飯田 勇（1973）「稚内オニキリベツ遺跡第一次発掘調査報告」『北海道考古学』9 札幌
 畠 宏明（1966）「札幌市平岸坊主山遺跡」『AINU MOSHIRI』II 札幌
 藤本 強（1972）「常呂川下流域を中心とした地域の一般調査と竪穴群の実測」『常呂』 東京
 ——（1976）「遺物・遺構に関するいくつかの問題について」『トコロチャシ南尾根遺跡』 常呂
 山崎 徹（1972）『池田町の先史文化——埋蔵文化財報告I——』 池田

1979年3月25日	印 刷
1979年3月31日	發 行
編 集 後 藤 秀 彦	
発行責任者 家 村 克 行	
發 行 所 浦幌町郷土博物館 北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地	
印 刷 所 大同出版紙業株式会社 北海道帯広市西7条南6丁目	